

科目番号	科目名			英語名		
HE31013	病理組織学実習			Histopathology Practice		
標準履修年次	単位数	開設学期	曜日	時限	使用教室	
2年	2単位	秋学期 A	水曜日	3-4 時限	4 B 1 1 3	
		〃 B	火曜日	3-5 時限		
		〃 C	火曜日	3-5 時限		
担当教員（研究室・連絡先・オフィスアワー）						
長田 道夫（404・3171） 上杉 憲子（402・3938） 上妻 行則（4B 2F） 柴 綾（3350、診断病理学） 技術指導員 福中康子、菊川浩子（組織標本作製室） 細胞検査士 村田佳彦（病院病理部）						
学習目標						
<p>病理組織学や細胞検査学で学習した内容を、医療の現場で病理検査として技術支援するためにその手法を学ぶ。生体から検体として採取された組織や細胞に、試薬や器具を用いて検査の目的に合わせた適切な標本を作成する技術を身につける。また、細胞検査の手技と診断の実技を行う。実習中に染色法について、簡単な実験を行い発表し、理論背景の確認とその応用力を身につける。また細胞診の検体作成とともに診断も行い、細胞診についての理解を深める。これらの実習を通して、臨床検査技師国家試験への基礎知識も養う。</p> <p>本授業は以下のことを目標とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 病理検査の実際と検査技師の役割を理解できる。</li> <li>2. 病理組織標本作製の手順とその理論背景を知り、標本作製できる。</li> <li>3. 各染色の利点と病理診断へ意義について説明できる。</li> <li>4. 免疫染色、電子顕微鏡の技術と理論背景を説明できる。</li> <li>5. 病理検査で応用されている In situ, PCL, FISH の基本を学ぶ。</li> <li>6. 細胞診の基礎とスクリーニングの実際、重要疾患の診断スキルが身につく。</li> </ol>						
授業概要（スケジュールの詳細は、実習前に配布する実習書を参照のこと）						
<p><b>実習講義：</b>病理解剖の介助と各臓器の肉眼的観察方法などについて解説する。また、組織標本、細胞診などの検体材料の取り扱い方法、固定、包埋、薄切、染色方法、さらに適正な標本とはどういうものであるのかについての基本的原理の理解を促す。病理診断に必要な、特殊染色、免疫組織化学、In situ, FISH、電子顕微鏡について、その理論と手法について解説する。</p> <p><b>実技：</b>実際の臓器を対象として、切り出し、肉眼像の把握、ブロックの作製、薄切、各種染色の技能を養う。染色標本のスケッチを行う。グループごとに染色の実験を行い、結果を発表する。細胞診の代表的な固定法や染色法を実習し、典型例の標本の観察とスケッチを通して、細胞診の診断を体験する。</p>						
使用言語（ <input checked="" type="checkbox"/> してください）： <input type="checkbox"/> 日本語・ <input type="checkbox"/> 英語・ <input checked="" type="checkbox"/> バイリンガル						
単位取得要件	全実習の2/3以上の出席と学期末試験の受験					
使用教科書・教材	臨床検査学実習書シリーズ 病理検査学実習書（日本臨床検査学教育協議会監修、医歯薬出版） <b>基礎病理技術学（病理技術研究会）</b> <b>細胞診を学ぶ人のために（医学書院）</b> 実習テキスト（実習前に配布）					
成績評価	学期末の筆記試験、実習レポート、実技、実習態度などにより総合的に判定。					
備考:いろいろな手法の目的と原理を理解し、実技としての基本を厳守しながら技術的な工夫をする。作製した標本を観察し結果を正しく評価する。現在学んでいる技術がどのように医療現場で役立つかについて理解する。実習中には待ち時間が生じることもあるので、時間の活用を十分に考える。実習に際しては、 <b>教科書や参考書を持参する</b> 。太字は必須の教科書。実習室では白衣を着用。						